コーヒー ブレイク
Coffee Break

津軽鉄道ストーブ列車

Railroad train

会員　本林 健一郎＜53期＞

青森県弘前市の北東にある五所川原から津軽中里まで総距離20.7キロメートルを走る津軽鉄道というのがある。この津軽鉄道は，11月中旬から3月中旬まで1日上下2本につき，席の両端を引っぺがして代わりにダルマストーブを置くストーブ列車というのを走らせる。私は，鉄道ファンであるのでこれに当然乗らなければならない。そこで，少し前の話になるが，平成15年1月4日午前10時55分にJR五所川原駅に降りたった。

津軽鉄道の始発駅である津軽五所川原駅はJR五所川原駅の隣にある。ちょっと寄ってみると，20人入れば満杯という小さな待合室に既に20人ほど集まっている。改札は発車10分前にならないと開かないので，切符を買って21人目になった。

しかし，待てば待つほど不安になる。乗ったはいいが特等席であるストーブの近くの席は取れるのか。まだ客が来そうなので，そもそも席に座れるだろうか。ああ，早く列車がみてぇ。



そこで一計を案じた。待合室を出て線路の方向に100メートルほど行ったところに高さ50センチほどの鉄の柵でできた保線工用の入口がある。辺りを見回して人がいないことを確認した後，よっこらしょとその柵を越えて線路に出た上，どっこいしょと線路からホームに登った後，駅員に見つからぬようホーム内の待合室に入って身を潜めた。待合室はホームに人がいないことになっているのでストーブに火は入っておらず，気温は正確には分からぬが零下であることは確実である。

足先と指先の感覚がなくなった頃，トコトコと列車が到着した。列車は機関車を除いて3両からなり，1両目は世間から「走る棺桶」と呼ばれかねない古い客車が，2両目と3両目は新しい客車が繋がれていた。私は，この津軽鉄道に遊びで乗りに来たのではなく，鉄道ファンとして活動するために乗りに来たのであるから，勿論「走る芸術品」である1両目に乗ることにした。

内装が良かった。全体が木貼りなうえ，ニスでセピアな飴色になっている。席も真っ直ぐ直角の木製の席で背もたれには緑色のモケットが張られている。微かにトイレの匂いもする。

窓枠が良かった。今はなかなか見られない真鍮製で，窓を開けるつまみは幾多の人の指を経たであろうミルクキャラメル色である。

セピア色の空気の中，ストーブの近くに座っているとなぜかキャンプファイヤーをやっているかのような気分になる。「人はキャンプファイヤーをすると自分の悪行について話したくなる」というタモリの名言があるが，終着駅に着くまで前の席のご夫婦としゃべり続けてしまった。

なお，この津軽鉄道は，7月と8月は列車に風鈴を取り付ける風鈴列車，9月から10月中旬までは鈴虫を入れた籠を載せる鈴虫列車を運行している。